

低学年段階における「気になる児童」に対する 学級担任の支援のあり方

—— 学級集団の関係構築に焦点を当てて ——

学籍番号 199224
氏名 松本 大地
主指導教員 高橋 登

1. 背景と目的

1.1 本研究の背景

現在の学校教育の課題として、発達障害や愛着形成、コミュニケーション経験の不足などを要因とする社会性に課題のある児童や「気になる児童」の社会性の発達を支援することが挙げられる。社会性の発達とは、他者との関わりのなかでその社会の成員としてふさわしい態度を獲得していくことと、独自の個性を受容し尊重しながら主体的に自分自身を活かしていく過程を意味している。その支援においては、集団との関わりが切り離せない問題となる。つまり、社会性に課題を有する児童を含めた学級集団作り、学級経営のなかでその児童の社会性の発達を支援していくことが望ましいのである。従来の学校教育では、学級経営を軸として、児童の個の心身の成長発達に対する支援が行われてきた。しかし、現在は、児童の学力や心の面の成長発達に対して大きな役割を有している学級経営において、いじめや不登校、暴力の増加など、深刻な課題を抱えている状況にある。そのような状況のなかで、児童の社会的スキルおよび社会性の発達を支援していくことは決して容易なことではない。

1.2 本研究の目的

本研究では、松本・高橋（2015）が教師のどのような取り組みが児童の関係構築や社会性の発達支援に影響を与えているかを明らかにした仮説モデルをもとに、小学校低学年の通常学級における「気になる児童」と学級の児童との関係構築を進め、観察していくなかで、「気になる児童」の社会性の発達の時系列的な推移について考察し、その特徴を明らかにすること及び、児童の関係構築に向けて低学年段階においてどのような学級経営をしていくことが望ましいのか実践的な示唆を提示するなかで、「気になる児童」や学級集団のどのような社会情動的スキルが向上していくかということについて、茨木市が提唱する社会情動的スキルに関する「茨木っ子力」に則して明らかにしていくことを目的とする。

2. 方法

2.1 研究対象児

著者が勤務し担任する大阪府内にある公立小学校の学級に在籍する児童（2019年度1年生、2020年度2年生）を対象とし、学級内での様子を担任の視点から観察した。また、本研究は「気になる児童」を観察対象の中心としており、その対象児を児童Aとした。

2.2 エピソードの収集方法および分析手続き

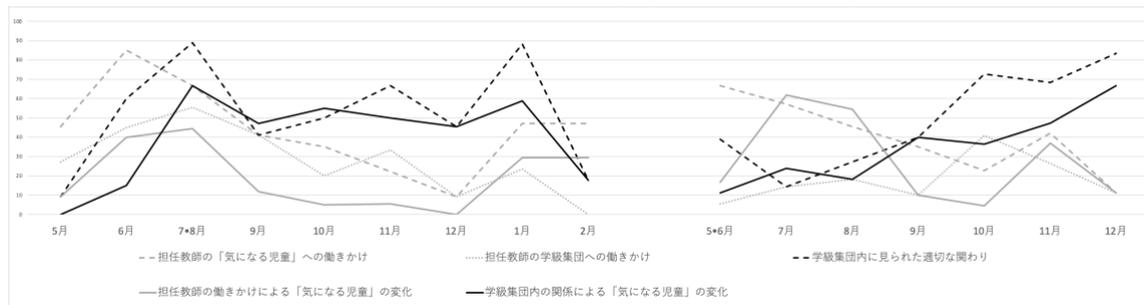
2019年5月17日から2月26日までの期間と、2020年の5月14日から12月25日までの期間のすべての教育活動における児童の言動に着目し、1. 児童の言動に対して行われた教師による指導・支援における配慮や意図的な介入、2. 教師により示された関わりモデル、3. 児童の認め合いを促す働きかけ等の児童の関係構築への取り組み、4. 学級内の児童同士の関わり、5. 関わりによる児童の言動の変化、6. それを下支えする援助者同士の協働、7. 協働や児童との関わりから得られる児童に対する意識や理解の7点について記録を行った。得られたエピソード数は374であり、松本・高橋（2015）の仮説モデルによる概念に分類した。

次に、仮説モデルの1.から5.に分類されたエピソードを以下の5項目に再度分類・統合した。その内訳は、①担任教師の「気になる児童」への働きかけ、②担任教師の学級集団への働きかけ、③学級集団内に見られた適切な関わり、④担任教師の働きかけによる「気になる児童」の変化、⑤学級集団内の関係による「気になる児童」の変化である。

3. 結果と考察

3.1 エピソードの集計結果

それぞれのカテゴリのエピソードの時系列的な変化を以下に示す。



3.2 考察

①対象児は、学級開きがなされる1年間の始まりの段階で、重点的に教師による支援や、その児童の特性が活かされるような指導を受けることで、徐々に周囲の児童から受け入れられることや認められる経験が増えていき、対象児が自らの学びや成長を実感するようになる。②その実感は、次の学びへのさらなる原動力ともなり、児童自身の学びに向かう姿勢の変容や日常生活場面での行動の変容として現れるようになる。③その実感の背景には、対象児の忍耐力や自己制御、目標達成の思いなどの「自らの目標の達成」に関する社会情動的スキルの高まりがある。④教師による環境の設定や児童同士のやり取りのなかで、対象児と周囲の児童が互いを理解し合うようになるにつれて、対象児が自分を認め、評価してくれる仲間という存在を感じるようになり、対象児の友達との関わりや休み時間の過ごし方など行動に変化が現れるようになる。⑤仲間意識の芽生えの背景には、対象児と周囲の児童双方の社交性、他者への敬意、思いやり、道徳性などの「他者との協働」に関する社会情動的スキルの高まりがある。⑥学びや成長の実感や仲間意識が芽生えるなかで、児童の自己肯定感、自尊心、自信、楽観性などの「情動の制御」が育まれうる。以上のように、対象児は学級において教員や周囲の児童と様々な関わりの中で互いの違いや良さなど、互いへの理解を深め関係を築いていくなかで、社会情動的なスキルを身につけていくことと、対象児との関係構築を行なっていくなかで、周囲の児童も同様に「他者との協働」に関する社会情動的スキルの高まりが見られることが明らかになった。